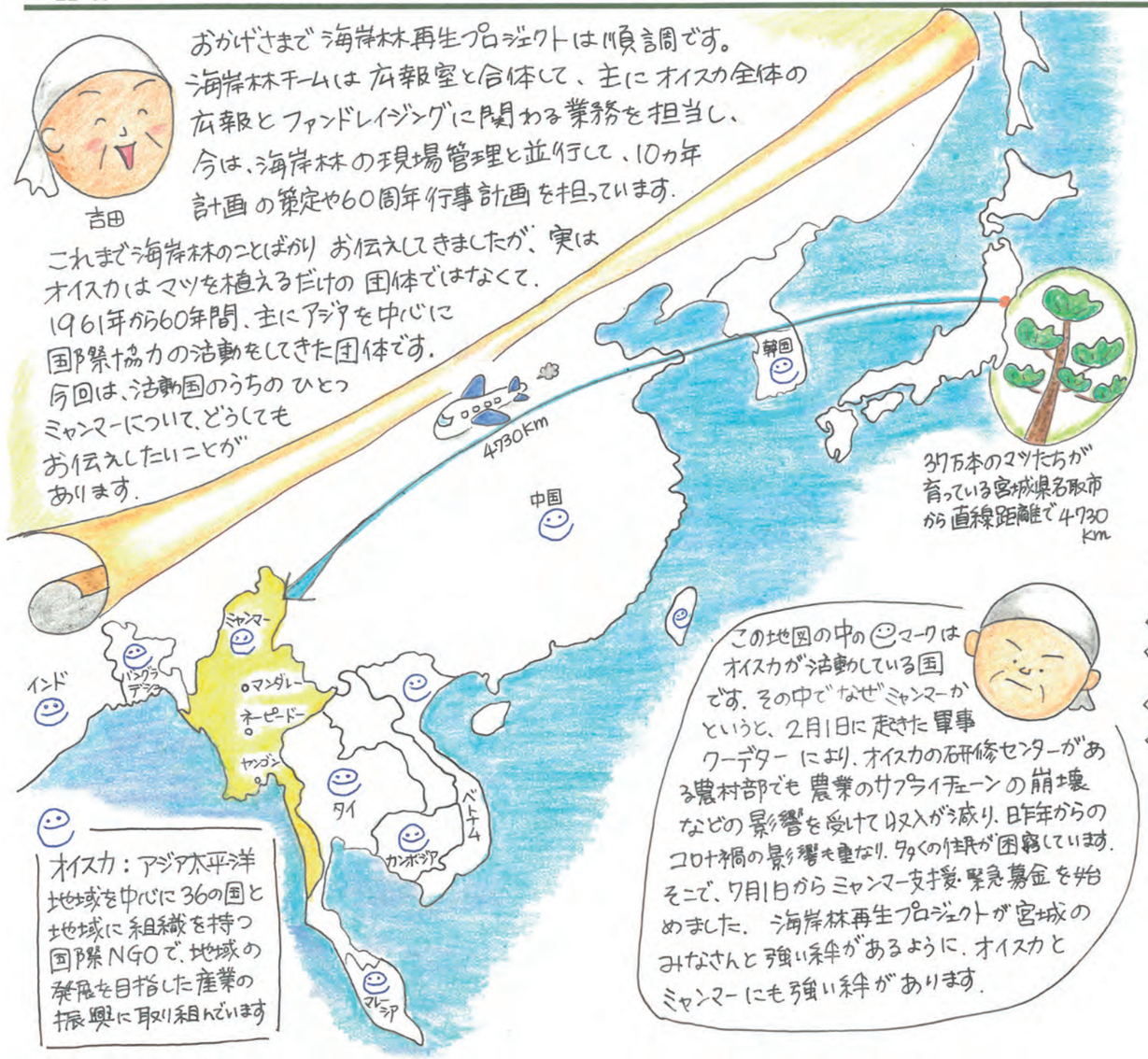
吉田

おかげさまで海岸林再生プロジェクトは順調です。海岸林チームは広報室と合体して、主にオイスカ全体の広報とファンドレイジングに関わる業務を担当し、今は、海岸林の現場管理と並行して、10カ年計画の策定や60周年行事計画を担っています。

これまで海岸林のことばかりお伝えしてきましたが、実はオイスカはマツを植えるだけの団体ではなくて、1961年から60年間、主にアジアを中心に国際協力の活動をしてきた団体です。今回は、活動国のうちのひとつミャンマーについて、どうしてもお伝えしたいことがあります。



オイスカ：アジア太平洋地域を中心に36の国と地域に組織を持つ国際NGOで、地域の発展を目指した産業の振興に取り組んでいます

この地図の中の☺マークはオイスカが活動している国です。その中でなぜミャンマーかというと、2月1日に起きた軍事クーデターにより、オイスカの石研修センターがある農村部でも農業のサプライチェーンの崩壊などの影響を受けて収入が減り、昨年からのコロナ禍の影響も重なり、多くの住民が困窮しています。そこで、7月1日からミャンマー支援・緊急募金を始めました。海岸林再生プロジェクトがみなさんと強い絆があるように、オイスカとミャンマーにも強い絆があります。

オイスカとミャンマーの歴史をひもといてみます。

さかのぼること27年。時は1994年、国連からミャンマーでの共同プロジェクトの発掘の打診を受けました。国連とオイスカの合同調査団は、2回の現地調査を経て、イェサジョ郡パカンジー村に人材育成のためのミャンマー農林業研修センター（当時）の建設が決定しました。その後、オイスカとミャンマー政府が1996年1月に協約を交わし、1996年5月に日本人技術員を派遣し、石研修センター建設が始まりました。多くの日本人とミャンマー人が協力して作業を進め、1997年7月に開所しました。

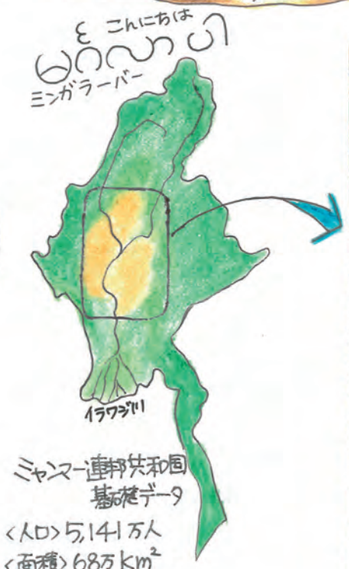
25年前の吉田

石研修センター建設中のミャンマーを訪れました。ミャンマー国内で最も過酷な地域とは聞いていたけれど、これほどまでか…と言葉を失いました。「土砂漠」とはこういう場所をいうのだ、ここで稲穂が実る日が来るのだろうか？と半信半疑でした。

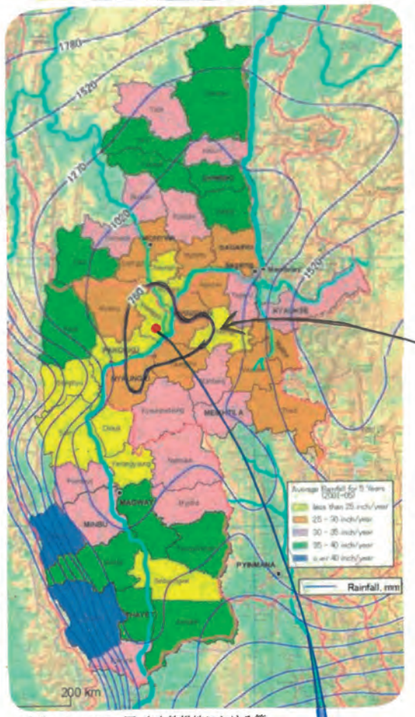
1996年11月
周囲はサバンナのような荒涼とした地

ミャンマー農林業研修センター（現 ミャンマー農村開発研修センター）の建設地

Magway地域（マグウェイ） Pakokku県（パコック） Yesagyo郡（イェサジョ） PaKhan Gyi村（パカンジー）



ミャンマー連邦共和国 基礎データ
<人口> 5,141万人
<面積> 68万Km²（日本の1.8倍）
<主要産業> 農業、天然ガス、製造業
<主要輸出品> 天然ガス、衣類、米、豆類、鉱物
（外務省ホームページより）



出典：ミャンマー国 中央乾燥地における節水農業技術開発プロジェクト情報収集・確認調査 ファイナルレポート（2013年JICA）

中央部は乾燥した土地が広がり「中央乾燥地」といわれる
（面積は国土の11%
総人口の約2割が居住）

等雨量線（mm）

ミャンマー国内で最も降水量が少ないのがハート型になっているゾーンで

Heart of Dry Zone
と言われています。

少雨に加え、降雨量が年により大きく変動することも農業生産を不安定にしています。このハートのほぼ中心に石研修センターがあります。

5年間（2001~2005年）の年間平均降水量

- 635mm以下
- 635~762mm
- 762~878mm
- 878~1016mm
- 1016mm以上

★ 名取市は1413mm/年

画像 ©2021 CNES / Airbus、Maxar Technologies、画像 ©2021 CNES / Airbus、Landsat / Copernicus、Maxar Technologies、地図データ ©2021

ミャンマー PaKhanGyi 地図

石研修センター周辺の地図はコチラ

オイスカ独自の村での活動メニュー

オイスカもWFPも都会の建設業者に道路や学校などをつくらせ、完成品を村にひき渡すなど、一方的に"支援"をしたのではありません。村人が必要としている道路やため池、学校などの整備のための技術や資金支援を主にしてきたのです。研修センターのスタッフが村との調整をし、労働力として主体的に動くのは村人です。地域を良くしたいと願う村人は喜んで作業に参加して、関われたことに誇りを感じ、大切に使っています。

藤井（ミャンマー事務所長 2006〜13年）

学校建設・改修支援（1998年〜）

小中学校31校・保育園4園

「子供の森」計画（2001年〜）

学校で子どもたちが植林を通じて環境を学ぶ。校舎が足りず青空教室で勉強することも多い。炎天下から子ども達を守る木陰をつくってくれています

マイクロファイナンス（小規模融資）

2008年〜 研修センター周辺の92村、約3000戸に融資

線香づくり、小売店経営などの小規模ビジネス支援、小規模農家の生計向上のための農業・畜産支援

WFPと（国連世界食糧計画）との協働メニュー

道路修繕

雨季には通行不可能となり、助かるはずの命を失い、学校へ行けないことも日常的に発生していた

学校に水タンク設置

雨水をためて手洗い、水やり飲み水に使っています

コミュニティフォレストへの植林

飲料用ため池の修繕

長年の堆積土でため池の底が高くなってしまうため、干あがった乾季に土を取り除き、堤防を補強

スワールガーデン

学校や家に菜園をつくり、野菜栽培に適した土に入れ替え、子どもたちの給食用の野菜を栽培しています。管理は子どもとお父さん、お母さん、給食づくりはお母さんが担当します

2020年にこの地を再訪しました。研修センターが隣接している国道沿いは民家が増えた印象です。それでも国道から西に少し入ると、25年前に見たのと同じ荒涼としたサボテンが生える土砂漠が広がっています。

WFPの現地責任者へのインタビューで、「土づくりができるのはオイスカしかいない」と聞きました。この地の主要産業の農業を支える「土づくり」の重要性をきっちり認めてもらえていることにこれまでの活動の成果を感じました。

★研修センターのあるイエサジョ郡には約300の村があり、そのうちの約7割の村で支援を実施

WFP：「飢餓のない世界」を目指して設立された国連機関。主に粉麦や自然災害などの緊急時に食料を届けるほか、飢餓と貧困の連鎖を断ち切るために地域社会や教育機関と連携し栄養状態の改善や生計向上につながる取組みを行っている。その対象は約80カ国8000万人/年。2020年ノーベル平和賞を受賞

藤井

駐在時の忘れられない思い出があります。東日本大震災の後、2008年のサイクロン災害で支援をした遠く離れた地域の村人が「これを役立ててください」といって村で集めた募金をわざわざ持ってきてくれました。世界の最貧国の中でも貧しい地域に住む村人が日本へ気持ちを寄せてくれたことが本当にありがたく涙しました。

このコロナ禍、政治的混乱の中、あの時募金を寄せてくれた村人、研修センタースタッフ、子どもたち、地域のみんなの様子が気がかりでなりません

協働メニューの直接支援を受けた人 104,275人（2005−19年の延べ人数）
間接的に支援を受けた人 約52万人

人づくりの拠点

農村開発研修センターでの研修メニュー

修了生がスタッフとして調整

日本のハイテク技術ではなく、知恵や伝統的な技術をプラスして、現地にある資材や機械を組み合わせ、その土地の環境に適した、より収量があがる品質の高い農産物の生産をめざしてきました

研修修了生 493人
訪日研修修了生 111人（1997〜2020年）

有機稲作

近隣農家に販売する優良品種の種もみを生産。とても人気があり、種もみとしてすべて販売、毎年完売し、ニーズに追いつかないほど

★2017年中央乾燥地のマンダレー地域ピョーボエ郡に2カ所目の研修センターを開所

故郷へ帰り地元のリーダーとして活躍

有機野菜栽培

生産地から消費地までの定温輸送の物流が整っていないため自家・近隣消費がほとんど。米・豆・油中心の偏った食生活に安全な有機野菜をプラスできるようトマト・きゅうり・なす・白菜などの栽培の研修をする

土づくり

土を劣化させる化学肥料は使わず、地元にある牛糞・鶏糞・米ぬかなどを使ってぼかし肥料を作り堆肥も組み合わせた土壌改良技術を学びます。ぼかし、堆肥は周辺農家に販売しいい野菜がとれると大好評

養豚

トヨタファーム（豊田市）で学んだ技能実習生が、ミャンマー農村部で初の人工授精に成功し、その技術を活かして年400頭の子豚を近隣農家に販売。豚糞や尿は肥料として利用

養鶏

平飼いで1000羽飼育。卵は販売し、食品加工にも使用

環境保全

木が育つと土の保水力があがり作物の生育にもいい影響があること、苗木の作り方、植え方管理の仕方など実践を通して学ぶ

保健衛生

「手洗い」「栄養バランスのとれた食事」「養豚・養鶏に必要な周辺環境」など、人や家畜が健康でいるための基本的な知識を学ぶ

食品加工

日本の支援者からの寄附と、外務省のNGO連携無償資金協力で施設や機材を整備。訪日研修で得た技術と日本人の技術指導で、野菜のカロエ品、ケーキやパンなどを製造販売

添加物のないパンは大人気!!

ミャンマー全国から男女10人計20人が10カ月間研修。共同生活の中で規律正しい研修と生活を通じて地域のリーダーとしての自覚が芽生え、故郷の農業や畜産の発展のために指導にあたる

修了生がスタッフとして調整

「地域に根差し、地域の人々の声に耳を傾け、決して背伸びせず、そこにあるモノを使い、地域の人々と日本人とが共に汗を流して、よりよい暮らしをめざしていく」これがオイスカの価値観です。一方的に押しつけるようなことはしません。長年のこのような活動を通じて、地元の人々からの信用を得てきました。信頼を寄せてくれている人たちが困窮しているこの現状に未来への希望がもてる支援ができないだろうか？ 私にできることは、みなさんに伝えることです

ミャンマー支援に関する情報はコチラ

7月21日「海岸林再生の石碑」建立

850,502,168円（2021.3.31迄）プロジェクトへの寄附総額

海岸林再生の石碑

〜少しだけ海岸林のニュース〜

南北5Kmの植栽地のちょうど中ほど、2014年にいちばん初めに植栽した地に名取市海岸林再生の会が石碑を建立しました。

石碑文は1400文字と、かなりの長文ですが、「どの文字も削れない、とても大切なことばかりです」と石屋さんが言うように、津波や海岸林再生の記憶が薄れているだろう100年200年先を見越し、津波の発生から海岸林を誰がどのように再生したかの記録をとどめています

石碑文はコチラ